

2021 年度 3 学期始業式校長メッセージ

明けましておめでとうございます。

氷点下の気温を記録する極寒の年明けになりましたが、皆さんお元気にお過ごしでしょうか。

新しい年を迎えましたが、旧暦ではまだ 12 月で、2 月の立春まで、本物の春はお預けです。今の暦は太陽暦ですので、月の運行と連動していた旧暦（太陰暦）とずれがあります。

1 年の最後の日は、旧暦でもともと月末に月が籠る「つごもり（晦日）」の最たる日という意味で「おおみそか（大晦日）」、また月初めの 1 日は新しい月が始まるという意味で「月たち（朔日ついたち）」が語源です。月の満ち欠けと繋がっていない、今の暦では連想しにくいですが、例えば旧暦の太陰暦が日常的に使われていた中世に著わされた作品『徒然草』では、季節の移り変わりの情趣に就いて具体的に年中行事を挙げて感慨深く記した段があります。その 19 段の末尾で著者兼好法師は、「晦日（つごもり）の夜（よ）、いたう闇きに（大晦日の夜、新月で月が出ていないのでひどく暗い中）」と、大晦日の月に触れつつ、「かくて明けゆく空のけしき、昨日（きのう）に変わったりとは見えねど、ひきかへめずらしき心地ぞする（こうして 1 年が過ぎて夜が明けてゆく元旦の空の様子は、年が明ける前の昨日と変わっているとは思えないけれど、うって変わって珍しい気持ちがあるなあ）」と、年明けの趣きに言及しています。大晦日に除夜の鐘の響きを聴きつつゆく年を振り返り、来る年の幸せを祈って、来し方行く末に思いを馳せ、そして、一瞬のうちにカウントダウンで新年を迎え一挙に華やかな賀正のイメージが広がる時空は、1 年の中でも特別だという感慨は古から変わっていませんね。

新しい年を平穏無事に迎えることができることは、本当に有難いことです。特にコロナ禍が続く、先行きが不透明な日々の中、朝、目覚めて日常生活を過ごすことができることに感謝の念が湧きおこります。秋以来落ち着いていた日本に於ける新型コロナウイルス感染症の状況が、12 月下旬からオミクロン株の流行で気を引き締めなくてはならない情勢になっています。感染力が強い変異株のようなので、今迄以上に「すべてのいのちを守る」ことを第一義に、油断と甘えを払拭して、皆で感染防止に努めましょう。

人類の歴史を振り返ってみると、感染症の流行によって歴史に大きな変革をもたらされてきました。中世のペストの流行後のルネサンスの隆盛、幕末日本での黒船到来によるコレラ流行が加速させた攘夷への傾き等、感染症の時代への影響は甚大でした。しかも、感染症はグローバル化によって広がってゆくので、グローバリゼーションの進んだ現代においては、たとえ今回の新型コロナウイルス感染症パンデミックを乗り越えたとしても、永久凍土の溶解によって新たに出現するかもしれないウイルスや、温暖化による既存の感染症の蔓延等、喫緊の課題は満載です。新型コロナウイルス感染症によって、デジタル化をはじめ生活のニューノーマル、即ち、対面からオンライン、集団のあり方等、様々な変化が生じてい

ます。「未来が早くやって来た！」と新しいスタイルに希望を抱くことも多いですが、人と人との直接のコミュニケーションに楔を打ち込まれる等、人間のあり方の根幹に関わる変更を余儀なくされました。コロナ禍で、グローバル化の勢いが静かである今こそ、グローバル化の意味、近代文明の本質に就いて、熟考する好機です。グローバル化の考察には、政治・経済・環境・文化・イデオロギー・宗教など多元的なアプローチが必須であり、難民問題・経済格差・コロナ禍等、多くの課題と深く直結しています。排外的な態度に陥ることなく、多様性を受け容れる寛容な姿勢を、まず日常生活において心掛け、ウイズコロナ、そしてコロナ後の社会についての私たちの生き方を探究し続ける姿勢が重要です。

ところで、冬休みに活字の本に親しみましたか。高3の皆さんは、迫る大学入試に向けて読書どころではなかったかと拝察します。しかし、過去問との格闘は読書に匹敵する思考鍛錬になったはずです。中1から高2の皆さんは、弁論大会の原稿執筆での寝不足で眠い目を擦っての登校だったのでしょうか。インターネット、YouTube動画、SNS等、短い文や映像を目にすることで情報を得ることが多い昨今ですが、活字に触れてまとまった長い文章を読み、言葉を鍛えてイメージ喚起力を涵養することは、デジタル社会を生き抜くうえで不可欠です。『スマホ脳』の著者で精神科医のアンデシュ・ハンセン氏は、「思考力における紙の優位性は、読むことにも書くことにも当てはまる」とし、特に「難しい内容の記事を読むときは間違いなく紙のほうが脳に定着する」と『自由の奪還』（PHP新書）所収のインタビュー「デジタルツールが蝕む心身」の中で述べています。人間は身体あってこそ、いのちがあります。身体感覚で味わうリアルを大切に、五感の感覚を研ぎ澄ましていきましょう。

皆さんは、国語科の多読プログラム「IEP（インテリジェンス・エボリューション・プロジェクト）」を活用していますか。中1・中2の基礎を経て、中3からは毎年、教科書以外に様々なジャンルの12本以上の評論を紙媒体で読み、「言語・情報・近代・身体・科学・国民国家」等の知識を蓄え、要約や読解の鍛錬によって言語センスを磨きます。評論家で、昭和・平成時代きってのインテリゲンチヤ、もともと血液学の医学者でいらっしやいましたが、フランス留学後に百科事典の編集長や評論家として活躍された、加藤周一氏の名言に「言語の危機はアイデンティティーの危機である」があります。私たち人間は、「考える葦」（パスカル）、「我思う、ゆえに我あり」（デカルト）の言葉にもある通り、思考することによって自分が自分であるという自己の存在証明を行っています。考えるための言語力が脆弱になり、自分が自分であることが揺らいでしまっは大変です。自分が自分であることを守り、しっかりした自己肯定感を育むためにも、言葉を徹底的に鍛えるコンスタントな挑戦を続けていきましょう。

高3の皆さんは、もうすぐ大学入学共通テストを皮切りに大学入試が本格的に始まります。新入試が話題となった今年の春の2021年度の大学入試では、世の中の急速な変化や

不測の事態に対応する力を測る「思考力・判断力」を重視する出題が「大学入学共通テスト」でも増えました。近年は、ガルブレイスの指摘した「不確実性の時代」より、自然災害・国際情勢等、更に不確かな時代になり、2020年以来の新型コロナウイルス感染症パンデミックにより、先行きは益々不透明になっています。現状の打開に就いて確固たる正解が無い中、自分自身で判断する機会は一層増え、更に今迄の常識を超える新しい発想が要請される現代においては、知識の習得に加え、得た情報や知識を教養に昇華させて、堅固な思考基盤をもとに粘り強く探究することがブレイクスルー的な問題解決のために不可欠であり、そのための評論多読等の種仕込みは必須です。

評論を読解するにあたっては、課題文に提示された筆者の問い掛け、そしてそれに対する論の展開に就いて、その対論を思い浮かべつつ多様な見解をイメージしてみてください。例えば、「感性は磨けるか」「シンギュラリティは現実になるか」「文学は実学か」等の問いに思いを巡らすことは、正解のない問いに向き合うための訓練になるはずですが、自分の頭で考えるとは、今迄蓄えた知識・情報を総動員させて、その知識・情報を臨機応変に編集する複眼的思考法を意味しています。但し、入試問題を解くときは、課題文が土俵ですので、一般常識や固定観念といった土俵の外で闘うことなく、課題文に寄り添って丁寧に解答を導くことが肝要です。入試問題は、だれもが平等に初見でのチャレンジです。周章せず、焦らず、諦めず、気を確かに持って今迄の積み重ねを信じて「エイ！ヤー！」の気概でとりくんでください。準備して待つ、満を持して事に当たる光塩生は強いです。幸運の女神様の前髪をしっかり掴めますから！

さて、中1から高2の皆さんには、「異化」という視点を紹介したいと思います。「異化」とは、文学作品等で非日常性を際立たせることで新たな認識を得ることですが、極度の体調不良や非現実と思えるような想像を絶する出来事との遭遇によって、自己の存在意義や信念等が窮地に立たされる危機に直面したときに得る体験と言ったら分かりやすいかもしれません。思うに任せない、ままならない状態、人知人力ではどうにもならないものがきの中で、神様にすべてを委ねて縋るという切実な思いが強く湧き起こってくることがあります。自分の力では、どうにもならない、神様助けてくださいという虚心坦懐な心持ちが、神様に通じる一番の早道のように感じるのです。「わたしは、世の終わりまでいつもあなたがたとともにいる（マタイによる福音書第28章20節）」というイエスの言葉に信頼して、今年も勇往邁進していきましょう。

昨年から続いている降誕節も、明日の「主の洗礼」で結びを迎えます。年をまたいで、キリストの誕生を祝う降誕節が続くことは、神様から与えられた継続的な時を実感でき、安心感を抱けます。コロナ禍の中、混沌とした状況は続きますが、3学期も勝負脳を全開に、健康管理に気を付け、所期の目標に向かって全力投球してください。

1月下旬には、新聞部主催の弁論大会も開催されます。冬休み中に執筆された玉稿の発表を心待ちにしています。

今年も、皆さんと御家族の皆様の上に神様の豊かな御恵みと御加護がありますようお祈りしています。

3 学期の日々、勿論今日も 1 日ファイト！です。喝！